

菟玖波集

五

和書門			
類	號	函	架
九	二七	二	六
冊	四	冊	架

213

內閣文庫			
類	號	冊	架
九	二七	二	六
冊	四	冊	架



內閣文庫	
番號	和 18279
冊數	4 (1)
函號	202 213

202-213







夫和歌者兩儀部判之後萬物未成
筆傳自神世迄于人代既聯章句漸

整トシツ慙文字分風賦比真推頌之六義

長短旋頭混本之諸躰是以詞林益

著華麗之艷思泉源添芳潤之流然

連歌者其言紛其旨遠義歸周詩躰

合和歌蓋日本武尊乎蝦夷嘆荒玖

波之艱難中納言炭持寄言於棹川

淺草文庫

水業平朝臣停情於逢坂関天曆御
門遺教旨滋野内侍北野天神告天
御戸漸舊皆是理入坐玄事通神妙
者也中葉介降雅詠愈轉篇什相聯
四時之景象莫不形容万慮之情性
莫不吟詠匪言述日城之風俗剽採
漢家之故事然則代々聖主加之撰
集家々前備為作軌範或詠花下或

囀月前之華羨譽雖出後世佳句不
傳遺音嗟呼惜乎而今華闕風馳京
洛依陽和之仁柳宮露遍邊藩被天
均之惠民養教化成孝敬寔舒幽情
常綴微詞或為諷詠之媒或為教誡
之端賢愚致誠尊早以陳心無不審
詞無不通茲以且讀夕見之暇感序
文復字之志述而不作名曰荒玖波

集不分古今之作不擇上下之句其
數二子有餘雖鄙徒謂點來物之嘲
拳乎於鄴林繞攀一_ニ枝高自於崑山
遍拾片玉璧_ヲ猶窺天以管測海以蠶
萬_ニ廢幾傳將來待能者子時文和五
年三月廿六日編輯已畢尋_ニ荒玖波
之道受_ニ佐保川之流云_ニ余

や海_ニの_ニ他_ニの_ニありて
る_ニの_ニありて
成_ニて_ニの_ニありて
風_ニ賦_ニの_ニありて
混_ニず_ニの_ニありて
花_ニの_ニありて
中_ニの_ニありて
文_ニの_ニありて
の_ニありて

菟玖波集卷第一

春連歌上

實治元年八月十日東百韻通平

ふけー子なき吾のじり消と絶

後信成院御歌

わら玉のやーれあし多歌なるま

こめまらりとまらりのわら

前大納言御歌

まはまの海戸れをけのうす

文の被升坊として百約を教ゆるる
な紙をうり教るを百約のうり紙

二品法親王

常々しりぬあふふに成わらうり
月ひさきく 長しとけりや

お大納言を成

ふのまらあふふもあはれし

お大納言の時家の百約をうり

紙とそけりや紙をうり紙をうり

これとあじ殿りのと紙紙の巻

うりまらや紙紙の紙とく

尊養法師

と紙紙の紙をうり紙をうり

紙紙の紙をうり紙をうり

教誨法師

紙紙の紙をうり紙をうり

そらうしああう神の紙をうり

後深草院少納言

うらわのわりのまのわりの
おらうと名うらうと名

美家園師

うらわのまのわりのまの
その神けて何かまの

前大細云為成

うらわのまのわりのまの
ほろお院河町白急感物乃建額
あされり

しあ子、うらう、まのまの
後二位家澄

うらわのまのわりのまの
弘長二年八月院乃度申百納道
争の中

福先園院入道前美富長

まのまのわりのまの
五月廿日好風さく香りの美富日

吾川のちのちの浪音として

わりの善のさしくあみり

兼意法師

月一息の歌をよみし清くして

しるすらりしるはる相系

性道法師

ふち色く歌のさしくあみりて

道あつらひしるはる相系

隆阿上人

ふちの歌のさしくあみりて

じふ中しるはる相系

隆阿法師

けうの浦らりしるはる相系

のほろあめ船のまらふあみり

兼意法師

ふ里は音清あつらひるあみりて

花よりうづもをよみし清くして

源頼成朝臣

春の心をよめるの歌

春の心をよめるの歌

源兼氏

春の心をよめるの歌

春の心をよめるの歌

田河清

春の心をよめるの歌

春の心をよめるの歌

お大納言

春の心をよめるの歌

春の心をよめるの歌

坂光の照流

春の心をよめるの歌

春の心をよめるの歌

後鳥羽院御歌

春の心をよめるの歌

建保六年四月院の度申百韻

建保六年

しうらりきとむら

後二位家隆

雲のしうれくも

春わきしうれくも

後二条院御製

梅しうらりきとむら

うらりきとむら

若しあま自はる

うらりきとむら

うらりきとむら

六条ゆき

うらりきとむら

うらりきとむら

お大納言

うらりきとむら

うらりきとむら

二品清親

うらりきとむら

水野結糸白連歌

運る老木の花の下

秋歌

朽きぬ梅乃白しり風をえ

れあそびし花のさき

尊卷

物さのさきり乃あはれもさ

寛文元年三月法勝寺花下

りなつこもしりさき心さる

兼巻

梅花よりあつりいさあて

寶治元年三月毗沙門堂花の

下りて

無生

花よりあつりいさあて

津さきの春はさきあつり

法下

花のさきりいさあて

春をいしやりのたゆらん

源頼康

三月を西より月影を照らす

にりあめりしよのまはうとさう

後深草院がゆゆめ

月をじしりかきみらん

えきうら子四月夜に殿百納とさう

日しきみしよのまをししり

後深草院御製

老いゆりのとさう月をさう

たのぶしりや又りあらん

関白前在る旨

月のとさうそはあまなり成ゆらん

乞のまぶしりしりあらん

二品法親王

海にさしきし月をさう

やらもさうしりあまなり

信大納言良久

出うじふ月のかりりりりり
春の歌音る御そとさしめる

菅原後歌詠集

かじんとともをりりりりりりり
法橋与花下のまきりりりり
そりりりりりりりりりりりりり

良心法師

勝たけ月を好るまらうりりりりり
春ののりりりりりりりりりりり

信照法師

かりりりりりりりりりりりりり
春をすまなる東らりりりり
本照法師

月かとしりりりりりりりりりりり
時のりりりりりりりりりりりりり
前大徳言為母

かとしりりりりりりりりりりり
つとちりりりりりりりりりりりりり

お大納言の女

おのりわくしてさうろくし成りたり
なほりぬくれしつらさうろく

教誨法師

又わろくおのりのはれあさし
月あはれさなほりつらさうろく

東鑑

おのりつらさうろく

おのりのつらさうろく

お大納言の女

おのりつらさうろく

おのりつらさうろく

お大納言の女

おのりつらさうろく

おのりつらさうろく

お大納言の女

おのりつらさうろく

おのりつらさうろく

後白河院御歌

雲井のしるも春やあけ
のる音は御海より花や枝ら

為監井入る前歌

わらわのしるも春のしるも
花のしるも枝の音もあけ

藤原家忠御歌

うらわのしるも春のしるも
花のしるも枝の音もあけ

春のしるも春のしるもあけ

わらわのしるも春のしるもあけ

六条前内侍

柳、枝り花もあけ

寛治三年甲辰門堂下の下え

花もあけ枝の音もあけ

道生法師

しらわのしるも柳、枝のしるも

正和三年二月法梅ちるもあけ

花をむすのすゝいかりり

若河法師

枝のこけ柳の眉のさかきり

ふいふつしねくろくろよけ

信女僧初永宣

あれきりや柳のうらみ

いのらるしん日くねれ

教深法師

白露れ玉のと柳のあうりて

春のほろりあさねの香い清きり

西園寺入道前太政大臣

わらふあつあつはるあつあつ

清輝ちるるあつあつ

わらふあつあつあつあつあつあつ

若河法師

うらみあつあつあつあつあつあつ

前太政大臣實教

よみれ戸のわくくまを困く

建保六年四月庚申百納の進言

りきりうきとみりく

板倉御流御筆

淡みり春れしりやうと

花ゆらう花しりのまの原

関白前より書

春の日はくくをさくられうて

文和三年七月うのつことしあ

つよきうくもあよ

草もよも月一島の町かえ

今上御筆

野六の春をわく國のん

かれしきう

日かひりしきくたれのは

よれら子れさくちらと花と

つあうさとの春う抱しき

右中將御筆

人をさし花のさしりれあはれ
正和四年六月一日百納建寺
しつこくしつこくしつこく

伏見院御製

のさしこくしつこくしつこく
弘長二年八月院の百納建寺
りつこくしつこくしつこく

入道なる者

花ありさしりれあはれ

さしりれあはれ

前中納言家

一色さあはれ花のさしり
又と花のさしりれあはれ

後膳院御製

あはれしつこくしつこく
あはれしつこくしつこく

花の院入道前大納言

花のしつこくしつこく

言のれうら花やらうん

前中納言有為

のましくも毎うささぬ梅より

法師さるの連中

かよみのうさ入おのこ

順光法師

つるれぬ花のうさやられん

れいさいさうらめ言うる

恒吉法師

ふ里り月也歌まて花とるそ

かこりりかきる春のうさ

良河法師

小車の中を花とるれて

それうさうさて細か

十住法師

ふ里は花ひりうさり

ふらの花とるそゆつと

花の枝とさうして一葉のうさ

源高房

春のつばき花のこころをいふに
いふ人のまはるやうにわらふ

梅阿上人

花よる花をまはりにうき
にもあはれりやとてうき

救世法師

花のつばき花をわらふに
さしきてあはれとてうき

尊養法師

ふ人のつばき花のまはる
花の春やすきうらや

圓白居士

ふれらあはれとてその花を
まはるやうにわらふ

二品法師

花のつばき花のまはるに
春のつばき花のまはる

花園院御製

ふれのうろつてあつたれふ井
と東の院中まよき海宮のつら
みり信や好りあとするそあ系
道信胡にふ候と好て四共のう
ろく入ゆて

伴瓊大掾

おしりしやうかきりてはり

うれきてもあうらそ色つらん

太宰権帥俊實

とろ色化ふはうとと一純
いとくぬれ音うと泣や甘うは

南無法華

ふあふもあしと花の下風
ふ里ろ夕る月うあまう

前卷儀宗年

花のつりやちかふと
かほのたふちかふと
花中納言

あつきのいづくの花と
元享二年も殿の花のしり
くつしつとつとつとつと
つゆつとつとつとつとつと

花中納言

月のけしきつとつとつとつと

つとつとつとつとつと
あつきのいづくの花と

つとつとつとつとつと
あつきのいづくの花と

つとつとつとつとつと
あつきのいづくの花と

つとつとつとつとつと
あつきのいづくの花と

前中納言定家

吾や久くそ花のさか

菟玖波集卷第二

春連哥下

それぬさるる花のさか

前大納言定家

久しとてとてあはるる花のさか

後鳥羽院御の百韻連哥下

日一庭了文右一とて

西園寺入道定家

うしの一花さるる産のめさ

白一葉一花

花より一葉一花

後醍醐院御歌

花より一葉一花

元亨元年四月十日

りともひのさき

後醍醐院御歌

花より一葉一花

わさきと

後醍醐院御歌

花より一葉一花

正和四年六月一日

りともひのさき

伏見院御歌

花より一葉一花

春くつと

常盤井

りともひのさき

庭じあを胡めりてと海をり

後先明照院前開自名臣

夜のしらり月そのしるし

夢もうつもる影りし

常規りし

いりあわいりりりり

花の院入道名長花のりり

約りりりりりりりりり

りりり

つりりりりりりりりり

約りり

明河法師

花のくくくくくくく

おのりりりりりりりり

教深法師

むのりりりりりりりり

うりりりりりりりりり

道守巻法師

予らねと我妻母の園をのりて

法師良澄

あはれとてしる花のこころ

いのちとてそのしむきし

法師良澄

あはれとてしる花のこころ

いのちとてそのしむきし

あはれとてしる花のこころ

いのちとてそのしむきし

中納言太閤

花よりぬ宿り来来と吹風り

いのちとてそのしむきし

照海上人

花よりぬ宿り来来と吹風り

いのちとてそのしむきし

美濃園師

花よりぬ宿り来来と吹風り

西芳精舎の花より美濃園師

池ありし船とくはて百韻はなす

おきり龍やなまらわさわん

二京法親王

春よりらる花より春のこゝろなれ

のらり思つて春よりなれ

寛胤法親王

なれも海と梅しと花のわなれ

いさうよりいさうしとなれ

道守春法親王

とまひ花をみるすりハ命よと

なれぬる後のわなれと

救世法親王

ふみり花の香の中なれ

圓白前代首家百韻はなす

わさのまらかもしりのは

大江成種

月よりらる花れは風あつなれ

なれさしつらりなれ

教宗の書

人とまらぬらりらりらり花教て
若くはまゝのわらわら

國白前た大臣

教とる海らりら花の海若て

まらりらりらりらりらりらり

左中お教

らり花のわやちらららららら

らりらりらりらりらりらりらり

たをか得業成

からりらり花るらりらりらりら

らりらりらり春らりらりらりら

花大信正系太

さのふら花るらりららららら

らりらりらりらりらりらりら

後二信の家

白少のりららららららららら

出るらりらりの月るらりらら

前大納言の巻

あはれにうらみ花をらるらん
春をうらみもりあはれをらるらん

二品法親王

あはれにうらみ花をらるらん
あはれにうらみ花をらるらん

前大納言の巻

あはれにうらみ花をらるらん
あはれにうらみ花をらるらん

前大納言の巻

あはれにうらみ花をらるらん
あはれにうらみ花をらるらん

前大納言の巻

あはれにうらみ花をらるらん
あはれにうらみ花をらるらん

前大納言の巻

あはれにうらみ花をらるらん
あはれにうらみ花をらるらん

疾意りし

めりも人花を風のしほり夕花
よといふる風のしほり夕花

前大納言の家

かしのさくらんらねさくらん
天津風我々さくらん吹く

祿念院入道大納言の家

らねさくらん花をかくらさ
一村の松のまゝらり流るる

園白家名

わしはさくらん花のうす

園白家名

あつたつたそのまゝらり

敬法師

あつたつた花の夕花さくらん
あつたつた花の夕花さくらん

友原宗秀

あつたつた花の夕花さくらん

何處よりと由都心はわろめと

源信純

とれかりて花やららら

ら花とさう娘春のうら

舞意法師

庭より花散りしと忘れぬ

さしをうしてふ系小車

因阿法師

ら花とさう娘春のうら

音よりなる川のとと

源行武

風そよぶも花の又教へ

音より入らる春とらぬ

法華時寶

花とさうて多や鳴らん

かよふのうら月とて

源高朝

咲とや一校より花のうら

うささく何と人のうさびる

源朝光

けりてしよ下あり花らうえ

花らうえりてしよ下あり花らうえ

源朝光

けりてしよ下あり花らうえ

天曆御時殿さのかうしよとて

ふの花えんまきしよとてはるよあさ

の標の枝とやりて新ようて

かうしよとてはるよあさ

源朝光

花を梢しりけりてしよとて

源朝光

うささく何と人のうさびる

うささく何と人のうさびる

源朝光

うささく何と人のうさびる

うささく何と人のうさびる

友京町忌

梅り歌来浪のわ〜
文和四年六月圓白家より白鳥
よ鳥るなぬこのうらうら
まはり〜とゆゑ

救世法

花の〜
さの〜

あふ絶えき

河浪の又うれ花〜
と里や〜

圓白あふ

花るはすき月るあり
梅り歌おの西の

たを中め義徳

あ〜
くれらるる春うす〜

春景

ふゆのこけの月のおとこふと春のめえ
つゆのつれをきくしつ

津水法師

ふゆのこけの月のおとこふと春のめえ
寛元四年三月法勝寺花下
春のつれをきくしつ

藤原朝臣

ふゆのこけの月のおとこふと春のめえ

ふゆのこけの月のおとこふと春のめえ

前中納言

ふゆのこけの月のおとこふと春のめえ
つれをきくしつ

氏部

ふゆのこけの月のおとこふと春のめえ
つれをきくしつ

源氏頼

ふゆのこけの月のおとこふと春のめえ

大しりもわさき殿とていふ

嘉阿法師

山ぬりより下つていふ花咲て

うらみは花よりかきぬはれま

友系親長御旨

春日の花よりいれを親友よりし

ま日結成りこりりゆりり月次

のまじり

ゆれりも志とち成いのりり

大中長御旨

神より友よりいれりいれ

くれりり春りりやうりり

周阿法師

友よりいれりりいれりり

いれりりいれりりいれりり

深頼基

友よりいれりりいれりり

いれりりいれりりいれりり

二品法親王

ふしりなかり春れわさし
別進りまのわたりてまゝ

依見院御歌

いさくちらこもてこもじり
わらりこりきりしめされ
二品入道長久

いさくちも春のりみゆら
しりりしめされ

前中納言有忠

かきりわね春のりぬれ
まろしめされ
お春儀友



わらりこも心ほくし
業れすもてしめされ

たを中持美吟

別進りま春らりり
下のりゆやしめされ

松浦季流并内務

け美の露のころも所より出え
寛元四年二月花下連寄り
わらわくもわらわく路のうた

系月法師

うられ月日記 ねまもわら
さか月日記 花よりうら

常曉法師

石の春さうりりくれ果え

圓白家のまのの連寄り

不ふゆくくぬ所さう徳わまをまよ

寂法師

的日記てれ日記のたささうまら
花ささじしあささあさあさ

性善法師

春のうらへは、ちか菜れうま
まらやらん花のおもり

信大徳寺實其

一書とくしりわたりさるわかし
うきとくしりわたりさるわかし

あふゆをなむ

り春のわらもあはれ別れは
時とあはれはりたれのみ

浪二位家澄

さくらちや花のくささる

菟玖波集巻之第三

夏連哥

さくらちや花のくささる

菟玖波集巻之第三

世中の一花あはれ

さくらちや花のくささる

菟玖波集巻之第三

たけなすきしりわたりさるわかし

寛元三年三月花下の事

かゝるのこゝれおののちりこ

道基法師

非トつらお月のみこもあきくん

神の昔をうらつくもい

前大納言の家

うのたのらりたけこのちりあ

道基法師の家のみつ連年

ちりやうらこのちりあ

お花の地がうきよ

はのちりあ

十徳法師

うしおちりあ

らあゆらあ

道基法師

あこのちりあ

くのちりあ

あつたあの日

あつたあの日

お深き

わが心さかしのと代りすれ
この心さかしのと代りすれ

素阿のし

しるしとて親もし
花らぬわが心やうん

前大納言

ころらとて海さうさか
月のおのりさか

今と御

あつたしるしとて
しるしとて海さうさか

後二信行

あつたしるしとて
しるしとて海さうさか

後二信行

あつたしるしとて
しるしとて海さうさか

前大納言

とよみとらさし月とゆて

活板紙

さわかきら——とみり部と
やり——とわれとみ知ら

後久新太紙

ふ月のつらありありの
ぬれぬれ——とれとれ

紙河津

よれくあり月とみらぬ部と
ええら子とみらぬの紙

のしり

しりぬれぬれぬれぬれ

書生紙

子知りぬれぬれぬれぬれ
しりぬれぬれぬれぬれ

紙河津

わわがばる長き物さうりつるよ

家月六と平

次書改本

いゆりてわわらくよ。時を

常盤井念書改本

花そらられの色さばりするな

延暦四年七月七日の書七千部

〇書一なり。

前書改本

うきほく物つあわらし風を

とゆり

後院御院御製

木のつらさりあけらそららるれ

少ゆりりりりりりりりりりり

圓白前本

そらら花のうらららららららら

あそりそ人のりりりりりり

前大納言

なら花より枝とらんはの栞とて

正和元年三月は帰るる向し

わやあれまうじとらしたる

佐照法師

そら花のりりしとゆし何とて

は橋のまろ夏の日かろ

兼意法師

くらむいさわの神のたろま

はらひのまろきとくある

前大僧の道言

か月毎りりしけりもや落れは

よしりりりりりりりりりりり

有る女改

おとろまろきとらとらとら

ああああああああああああ

救世法師

か月毎りりりりりりりりりり

昔の山川とよれとよれとよれ

前中納言有光

お月白くしるあさちめは 澁落て
うりまあめは 淀の友家
ほろお流し舞

おさうりり葛藤とそめお月白く
おさうりりかとし書と成りり

後深きよ流の御由

お月白く水乃のやうりり
お月白くしるあさちめは 澁落て

後深きよ流の御由

お月白くしるあさちめは 澁落て
お月白くしるあさちめは 澁落て

後二位家隆

お月白くしるあさちめは 澁落て
お月白くしるあさちめは 澁落て

前大納言有光

お月白くしるあさちめは 澁落て
お月白くしるあさちめは 澁落て

お尋儀御宣

わがやとてか冥路の月影らり
風入るるにわらうるのや

右京長泰

あやふ月影らるるのあはれ
心影やしてくさくさの夏

源氏光

月影らるるあはれ
あやの甲らるる影をくれ

たを中納言

夏行れらるるあはれ
くわらうる海に風を秋ら

後光の照院お尋儀

あやふ月影らるるのあはれ
あはれあはれこのあはれ

後醍醐院御宣

らりりぬらるるあはれ
あはれあはれ人あはれ

西園寺入道おのゝみ

霧のしらけのまはりのあけ
野崎のしづめの下ま

道草巻

あけのしらけのまはりのあけ
あけのしらけのまはりのあけ
あけのしらけのまはりのあけ
あけのしらけのまはりのあけ
あけのしらけのまはりのあけ

前大納言の巻

あけのしらけのまはりのあけ
あけのしらけのまはりのあけ
あけのしらけのまはりのあけ
あけのしらけのまはりのあけ
あけのしらけのまはりのあけ

後大納言の巻

あけのしらけのまはりのあけ
あけのしらけのまはりのあけ
あけのしらけのまはりのあけ
あけのしらけのまはりのあけ
あけのしらけのまはりのあけ

経典の月入修し出と一ぬ

前巻綴紙

う川のうりしりらりて

きぬくさうぬ曉るうし

後二任家法

美本の戸とさうれあ窮ん善ん

あつさうさあもそくくあり

後律即定運

月の入あはたあ窮の知りさう

あまらありのうりらりあ

後法

交川の入はのこりらり〇

修のりらりり喜こいあ

後少増紙・お運

清くありのあのがくさうあ

つしんあうくくのらりる

良紙り

きうらうらうらうらり大

ふりーうき店の窓へ

因何りし

わつと火ろと燃るりちのりあ

水野結ふるま

しつとましつとましつとま

二京法親と

あつと何と何と

あつと何と何と

花園院洲歌

はげと何と何と

らねと何と何と

有京内本朝臣

わつと何と何と

水野殿の女御の

しつとま

あつと何と何と

水野殿女御

あつと何と何と

くちらわらぬらんぞと

後醍醐院御歌

くちらわらぬらんぞと

くちらわらぬらんぞと

後醍醐院御歌

くちらわらぬらんぞと

くちらわらぬらんぞと

前大納言御歌

くちらわらぬらんぞと

二品法親王

くちらわらぬらんぞと

くちらわらぬらんぞと

教皇法親王

くちらわらぬらんぞと

宝治元年三月見少の雲の夜の色

くちらわらぬらんぞと

くちらわらぬらんぞと

平生法界

しじくぬし神をすし
ありしうらう海枯る下流

有系信實胡也

衣自らぬりしとこし凡略て
うしうしうとあふ向歌うし

前大納言之友

草乃原きりし夜野の鳥あり
なるなるいれり杉のむら

卜部言あ

月影のやうに清みみ流あけ
何なるゆくりりりり

魯儀雅給

かりけりしとこし入りの泉灯
あつ風も神のこしとこし

氏名の友

しよるしとそぬくの井りあり
平等院僧正行宗洛国終りし

ゆきかきしつれむあはれな
わさつくりりりりりりり
りりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり

花の園

わさつくりりりりりりり
りりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり

この形はわさつくりりりり

花の園

夏草と秋草の花のりりり
りりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり

しりりりりりりりりりりり

花の園

りりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり

関白大臣

よしのの紫未の露乃のしら
しほのあつまのまけの黄白
後醍醐院御製

秋らしき川

はるの院御製
しほのあつまのまけの黄白
後醍醐院御製

後二位家隆

風よりかろくわさるゆり

菟玖波集巻中四

秋連秋上

文和三年七月七日

秋らしき川

今上御製

あつまのあつまのまけの黄白

秋らしき川

関白大臣

秋の香 秋の香

貞和三年六月秋系殿百約止年一

いふりゆらけりい月のつらき

花園院少監

秋乃さゆれあそけしゆふあ
と、月もあはあきこころあそ

二品法親王

さのみふさうのりも秋のま
りりしさをるつふあそとあ

教護法一

秋のそく風を町をり吹くそ

尾花、すなう露のしあ

前大納言高氏

神も又夕の秋をささひりて

この葉しづれのまこころあ

久良親王

秋のさゆれあそけしゆふあ

く月もあはあきこころあそ

後深院赤由約

物より生くるれ草の紫の露
ふしの戸よりて凡かのふらり

前大納言治實妻

七よのせし心よのりみきり
又よのしも地よふくさ

信實朝臣

海よりわらちきりもるぬら川
えきまふひ十月迄の敷百約也平一
まへちりりあふりあもるぬ

後中納言院御書

ひさのまのしそららるるも地澄
書りも格のしりハききり

前大納言治實

うらまのありて秋月のま川
まへちりり秋るるしりりの光

前大納言

織女もゆれぬくもや可しり
ふ葉の葉の舞れまへる

秋の法郎

かゝあひのまはるる七の日照る
秋のまはるる七の日照る

秋の法郎

かゝあひのまはるる七の日照る
秋のまはるる七の日照る

秋の法郎

かゝあひのまはるる七の日照る
秋のまはるる七の日照る

秋の法郎

かゝあひのまはるる七の日照る
秋のまはるる七の日照る

秋の法郎

かゝあひのまはるる七の日照る
秋のまはるる七の日照る

秋の法郎

かゝあひのまはるる七の日照る
秋のまはるる七の日照る

河世人のいふいふのいふ

尊養法

秋をいふれり也とせしむる

月紙の事とていふは終末

如何法

風よりせしむる起る萩り

秋の事や秋をいふは事也

春原言

春の事とていふは春の事

あさちとらふは花さぬ事

秋の事

ゆりさしはうさうさうら秋を

節の事とていふは秋とて

二品法親王

さうりつ秋をいふは事也

秋の事とていふは事也

前大僧正賢俊

中世の事とていふは秋の事也

あつ—ふらつを方々のわき音

前中絶之定家

ふくすいじゆりせう萩のちり

らうふ新とわらうらうじき

上階入道乃長

凡かよとのわきらうらうま書

ふる麻の羽ゆらうらう

圓白前乃長

地しるらうらうらう新のそ

葉れ戸らうらうのゆきの

今上御書

夕らうらうの秋とわらう

月しるらうらうらうらう

なを中絶乃

しらうらうらう萩の江の秋

月出つらうらうのらう

後大徳乃急名

あつらうらうらうらうらう

月もさういふことかみられ

後の信初永運

秋さらりよしやうしん

葉の戸やうの萩の上

年意浩一

なびうさば秋のうらまを

風よりさきしるゑうたう

年意浩一

朝ふり花をわきこもる

貞和元年六月家つと

すゝ一時的秋乃ゆふれ

年意浩一

物くわのーやう花のあは

なびさりのらさうやう

年意浩一

山登りあさうをひら

むらぬる霧うたうのう

年意浩一

か花ら歌の秋の——さきまをわたり
病りてせむしき心しりり歌子

相阿弥

松風の暮秋思屋の秋の

文和五年五月某日

成とてしるすしとてしるす

松の僧歌水運

秋の——さきまをわたり
多しき心しりり歌子

相阿弥

花さけらるるの秋の
秋の——さきまをわたり

相阿弥

病りてせむしき心しりり歌子
病りてせむしき心しりり歌子

相阿弥

入江の秋又——さきまをわたり
入江の秋又——さきまをわたり

前冬儀宗年

露のり敷ふのりぢりぬ板のり
わづら板のり月をくま

中納言忠嗣

羊牛して水くも露のりぢりぬ
くまのりぢりぬのりぢりぬ

友原忠親御后

露のりぢりぬのりぢりぬ
月をくまのりぢりぬのりぢりぬ

前大納言孝成

わづらわづらのりぢりぬ
くまのりぢりぬのりぢりぬ

友原長泰

露のりぢりぬのりぢりぬ
くまのりぢりぬのりぢりぬ

本法清一

露のりぢりぬのりぢりぬ
くまのりぢりぬのりぢりぬ

板東家平朝臣

うきよの舞とてささしめし
ゆきくさのふりも

後多の院門智

風くらし野への子種も花も

後多の院門智のささくれら

ねむらりゆふくれのき

西園寺道ある辰吉

くさのよふ園り竹垣あれそ

うきよの舞とてささしめし

前中納言定家

やぶりなまらり川音

うきよの舞とてささしめし

菅原清

秋もともものまをわ

牛くらしなまらり

順美法

秋もともものまをわ

月のしほをぬあつきの

ふゆ成程

らるる山野の秋月あつ

月しほをぬあつきの

道守成程

あつきのしほをぬあつきの

あつきのしほをぬあつきの

なすお成程

あつきのしほをぬあつきの

あつきのしほをぬあつきの

福光園念道お成程

あつきのしほをぬあつきの

あつきのしほをぬあつきの

あつきのしほをぬあつきの

及多お成程

あつきのしほをぬあつきの

あつきのしほをぬあつきの

あつきのしほをぬあつきの

後二位家澄

しおのうらけたりやあえ
そまゝうらり秋もしうら

敬洪法

まよあきく花見車つぎうとて
ねとあきとに風つりわう海
ふゆや花の散れ戸秋とらて
かろくのきまじく秋やまのらえ

後志の照院お美白乃之長

花よりあはれあはれうら

寛治元年八月十八日長仙の連考よ

しるしはくんのたうりそあうら

後深草院おおめつ

うらまゝすまゝとて秋のうら

前大納言の家

えあそまゝし秋もうらな海秋のあ
わけもまゝうらと秋もうら

秋のうら

初しをぬみ家の下の花すこ

やまのしつくるたのまゝに露

園白あたる居

水や池は月もしりよわよあそ

美のゆふるのわくわくちり

救済のし

一まわれ初しきりあ月清と

ゆふのささる秋やゆらん

尊巻のし

月も秋やまるくしりあ月をし

しつるしりあ月をし

二泉法親と

ゆふのり月を入もりあそ

一まわれ初しきりあ月をし

前大納言と

初しをぬみ家の下の花すこ

やまのしつくるたのまゝに露

園白あたる居

月をよもやまのかんていせ
船とすすしうおしこるるれ

浮れ文

わくもせし月のつらさの里しん
ひらりぬる程長雨の夏もあ

深き香

月をぬるしじ秋のゆきそめ
なごそしりりぬるの夕音

来意りし

なごそしりりぬるの夕音
り秋をむれぬるも色も

来何りし

月をぬるしじ秋のゆきそめ
音ある昔れ下をゆめれを

程の僧の長陰

月をぬるしじ秋のゆきそめ
夕音のゆきそめ

来何りし

あけくらくらぬく月を

神くしよよる病うらむ

二果法親と

月う水と夏海をくさくさ

海うさかかん海う秋風

松久純と書きたる

月う水と夏海をくさくさ

松安二年八月日吉村く

うり連中の中

うらもくもぬきん

法下定書

うらもくもぬきん

海も秋なり

源行治

月う水と夏海をくさくさ

楓のおまふ

松久純と書きたる

うらもくもぬきん

くわんていしんせいのしん

三河法印

くわんていしんせいのしん

くわんていしんせいのしん

前大納言

神

くわんていしんせいのしん

後大納言

春日

後大納言

くわんていしんせいのしん

後大納言

月

正和四年

くわんていしんせいのしん

伏見院

月

正和元年

里乃 みるも 遠くの人さわりを

二階入たる名

月よりわたりわさりの金と

花やこれ 流る心もかりかり

高沼を成

月よりやあのかたをみん

わらぬ月もあし一かたの影を

道生法師

秋のつらき月よりわたりを

高沼二年三月花下りて

あつらひのさかたにわたり

高沼を成

久これ月よりあつらひを

あつらひのさかたにわたり

高沼を成

あつらひのさかたにわたり

あつらひのさかたにわたり

高沼を成

やまゆりもわきいぬ月の夜とゆえ
秋のねりいりうきさやうきね

菅原長徳御記

ふりり月の夕なりゆりゆえ
こころもしげもねりね

道守春はゆ

ふりり月の夕なりゆりゆえ
さもゆりゆりゆりゆりゆえ

二品は秋

ふりり月も二の時わりて
ねのりゆりゆりゆりゆりゆえ

関白前も名臣

ふりり月も二の時わりて
ねのりゆりゆりゆりゆりゆえ

51

菟玖波集卷中五

秋連歌下

旁のうらも わらわ結風

前大納言為氏

ねりねまらう月のあつた

かりのさじーされしとあ

導卷りし

ふゆをい月のしきいしえん

あしきしきしきしきしき

教誨なりし

信業一のうのふり月見て

音一のうの宿る中一

性さなりし

長行の末に月見て

うさむ一のうの宿る中一

如阿なりし

月見らるる秋のゆふれ

卯一のうの宿る中一の秋

率意なりし

ふけらるる月見おきくたて

ぬらるる山一のうの宿る中一の秋

二京法親王

月見らるる秋のゆふれ

をらるる人のゆふれの中一の秋

後二位家隆

月見らるる秋のゆふれ

君一代のうの宿る中一の秋

あぢきぬ書きたる

月夜にたれぬ秋とわづらふ

六条の長 寝静の夢をよみて

ゆ

わづらふ言はるる

前中絶をたね

わりあはる月けらうれあふ海川

秋さむく成さこのしりし

南紅結

い移るその月けらうれあふ海川

二つをゆりかたもつらふ

案あよん

しつらふ秋あつる月のまゝ入て

秋さむくやこの秋あつる

秋あつる

しつらふ入 案あよん

秋さむくやこの秋あつる

案あよん

榮れ戸の月を暮るるに
可なはわりのしん
園白あふふ

あつさぬわしつ暮るる
何れこのせしん

花園院御製

月を暮るるに
能くさるるに

あふふ

上のかくりも月を
わかさるるの森乃上

二品法親王

さきにまね月を
榮りさるるの秋のしん

前系儀者良

月を暮るるに
あつさるるに

教書

まもなを浦のすそに秋月のせそ
ついでにあつたやあつたさうらう
まはるる

月影あつたさうらうのすそあつた
やまのなほあつたさうらう

頃元法

秋さじさ月影あつたさうらう

かよふさうらうはあつたさうらう

後二位新藤

八月廿八日
あつたさうらう

前大僧正賢俊

あつたさうらう

嘉暦四年内親の七日

夕日さうらう

後醍醐天皇

あつたさうらう

二氣法親王

ゆりゆりを歌いふるしる

尊皇念法

うさぎあつてをまは月よりうらん

うのねの終り終やうさぎうらん

鹿阿上人

月のなまじりてを歌いしる

くれのまじりてを歌いしる

高宗家後

雲より月のこころこころなりけれ

うさぎをさしあつてうらん

小御宗實

旅をせぬ月もさしあつて

かきこひてを歌いしる

信少僧都永運

ころ里のひらひら月出て

うさぎにうさぎかくしる

信少僧都叔宗

被いりてを歌いしる

露のしづかや 若屋のうら
津直資

下らさきつりのうら月らん
少とくうれぬき 袖乃と露

有原言表

月すめ月秋しとも われ 啓
和われくは 秋月そく

有原言表

く遠くより下月乃先出

少りの船とくじふのし

十のり

あはれくは月し ちく

二京法親王小野祐子句も

うきやうりく風をるれ

道寸巻

空の月山平の竹杖ゆふ

あす乃里の秋をるれと

床意

月はかたあやわらうくまを
いふはなれを何とせしむ

源成賢朝臣

月さくや有的とてあつちを
幾許とて月乃の影をよし

源季直

月明りちかあつちの月
相しあつちをよむの秋也

海老原宗信

月のをそまやふりちを
十とていふをさしし

前中納言有忠

秋のふりちか長月乃月
下名の秋とていふを

孝曉法一

いづれあつちの為とて
月乃ちかあつちを

法服良澄

秋美しやくもさあわいとあはれ
しきりさくさくさあわいとあはれ

はるの照院前書言

春のあはれさあわいとあはれ
うさゆきあはれさあわいとあはれ

はるの照院前書言

門田のあはれさあわいとあはれ
あはれさあわいとあはれ

園白前書言

うさゆきあはれさあわいとあはれ

暦負四年春日外宇治へ遷り

やあはれさあわいとあはれ

はるの照院前書言

宇治のあはれさあわいとあはれ

はるの照院前書言

春日野のあはれさあわいとあはれ

あはれさあわいとあはれ

はるの照院前書言

さむしねとておの麻ねさひ
ささるるるりり

前中納言有忠

ひりまじゆつるの唐の月のみ
小田とちも唐も

あふ納言有忠

稲葉より風のあふぬりるわ
月より置れりるりるわ

友京漫歌

相一本秋のつゆりるわさるり
くく連中つれも歌ひらり
らるりるるり一巻の折も折え
後多白院御歌

弘安二年八月七日度申
とらるるるるりるり
は後白院御歌
わらるるるりるり

一々れこの秋の心やまふらん
二品法親王

お秋の心やまふらん
ま下秋の心やまふらん

権僧正良瑤

文和の秋の心やまふらん
月出の心やまふらん

大細玄成

しこの秋の心やまふらん

文和三年六月家の心やまふらん
れ連守の心やまふらん

ちの秋の心やまふらん

関白兼左大臣

かこの秋の心やまふらん

り秋の心やまふらん

右京大夫

山田の秋の心やまふらん

一々れこの秋の心やまふらん

人に成程

じつとりのさうらぬ月より丁のそ

嘉慶三年七月五日

は光明堂流芳書白紙

神々しく読む秋のお句とゆ

流石胡流河製

ふゆのさきさきの物よりつらさ

さうらぬさきさきさきさきさき

今正御製

みまのわきわきさきさきさき

さきさきさきさきさきさきさき

たて中のあき

わらわらつたのさきさきさき

さきさきさきさきさきさきさき

尊天をりし

り鷹のさきさきさきさきさき

さきさきさきさきさきさきさき

権少僧師永運

とちと美ありきわのあとのあやとて
ちりちりちりちりちりちりちりちり

秋浦の

ちりちりちりちりちりちりちりちり

二品は親の家七百約も

ちりちりちりちりちりちりちりちり

周阿の

落雅乃ちりちりちりちりちりちり

美と秋とちりちりちりちりちり

春葉は

葉乃ちりちりちりちりちりちり

ちりちりちりちりちりちりちりちり

二品は親の

下露さのちりちりちりちりちり

月乃ちりちりちりちりちりちり

前中納之有光

ちりちりちりちりちりちりちりちり

ちりちりちりちりちりちりちりちり

救海のし

ふしらのすまのちのちよき感じ
うらなひのしりたなられ

有宗助其

わすれなきことり 砥石らうん
うらなひのしりたなられ

導細のし

我もきく秋のうらなひのしりたなられ
ふねのうらなひのしりたなられ

うらなひのしりたなられ

うらなひのしりたなられ

秋阿のし

ふのしりたなられ 秋の鷹
うらなひのしりたなられ

惟宗親友

うらなひのしりたなられ
うらなひのしりたなられ

浄水法

あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし

あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし

あまら秋のわしつあひし

あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし

あまら秋のわしつあひし

あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし

あまら秋のわしつあひし

あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし

あまら秋のわしつあひし

あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし
あまら秋のわしつあひし

あまら秋のわしつあひし

お美のわ戸をねりもろし
病さじとまのそむえんらな

お美の書

巨木のわいねしらららら
しとらねるや細うらえん

救世り

わねししらる羅秋と成わろし
ありし妙なる庭の朝しと

美の園所

うらうら草まらるじまぬ露は

わねりりきくを秋の凡

昔阿法

かきくはねまらりりり思案

文和四年五月家のあ白り

月とくしてまゆいとえし

園白あなま

らるこのあ白の秋乃無き

お美のりりれらんう吹

寐まか

くさめ下あつひの月と結ん

あしりりうひの月と結ん

連智あ

秋さしきひぬ秋さすくた

ささるうひの月と結ん

源秋文

りもあめ秋さうられの

心花乃うへをあまうり

秋秋

神さうを秋さうれを

荒政波集卷中六

冬連歌

かきみくしとの名れあはる

前中納言定家

ふゆしを終つる日影をくれそ

あすの川うせし福のる

后醍醐院御歌

あつしをくすむのくれあはるよ

くささの秋のあはるあはる

前大納言の女

しるほりつりくもはらまにたり
しひくハキウキハレねん

花園院御歌

ひかしをれとつ月もく
たは音ひりもさゆかやうな

前大納言の家

町角尾上のをいりくねん
又かろくくさひしられりな

福花園院お宮日記

神宮月宮の事祭れ教てけ
うらつりし冬もつらつりぬる

行實期信

事祭といしりりもさうる

後宮御院御歌

神宮月老のねえも町角り
夕日しなりてまじりぬる

たを中納言

あまのりしと又一し一かろじし可也
多白わしし一泪しし可也

寛弘法親王

ふしゆそまきさうそらの町毎そん
ねしし風ししやりの晴わん

権大納言良冬

しを統の故もわしししん
ゆら葉の上もね月の上

源朝義

冬れのことふもねをわらそん
又やうをねしし町毎そん

素阿弥

うそつるねのししししし
あらしきやわしししん

麻養

わししてしうまねとけししね
あしのみえおんしし

周阿弥

本業はも町毎とてくく神ありて
頼りあつるは相のまこと
左を少将義成

うりもまゝ母の町ありて
権久徳と實其

本業ちれ底よりしりて
定ちては町ありて

本業親を訓信

本業まゝくちありて

本業言者

わさしりてはもやららるる
うさき半はさきくもわさ

本業守成

本業の月よりたのじりて
定ちてはまゝくちありて

本業家時

本業又うさきくもわさ

こゝろの霧のたつとまはる
村登法一

ふんやねのしを結と結とん
ねとりりり冬くれもや

友京道直胡臣

舟まうん月あつた
わら若をいりりらえ
昔何あし

新のわら若をいりりらえ

みまのまのこを結川上

新何あし

雲く結くわゆるのひり
日影さひらやましく

大守長園親

ふ里は落とのうらり
わらわらうらり

新大納言の家

白おのしものしもの

しうとふれらぬを、此

尊如法

しむ心違ふやうと成りし

うらまへのしりしや

前大納言

行りておぼしうぬまふれ

いく秋とては月あかり

後中納言

十也のねりしりしは雲のら

友とてさき常とてしきくし

後二任家持

抄指しぬしきまふれ胡し

まふれしうらまやうら

お中納言

音のらまもるそぬ月れお

まふらわたりしあやまのん

後藤院御

ますりし行もししは路ひら

君はせくやうきさうれのきつて
前大納言お氏

ら回し入ひこまふあし
川をさびしとれと

二品法親王

あきのきふのふりぬをきん
吾家のきんをわらうき
導卷ありし

浜いりりなり川めうと少

との、お風し鴨うらうちる

教海法一

月のまく少し新やわさぬん
らうけうはるし、なうせん

以是法一

あ鳥りりさうりし落由
あきさうりりしりしり

深き湖

しも東の鴨の月し明勢

音のこぼるるしるしとや 小歌

平島貞

あきれ 少のこぼるるしるしとや 出

こぼるるしるしの音のこぼるるしとや

前中納言お歌

ゆらりゆらりおとすしとや 音の風

うさききよのこぼるるしとや ゆるり

行照法

しるしのこぼるるしとや ゆるり

しるしのこぼるるしとや 音の風

前中納言お歌

しるしのこぼるるしとや 音の風

しるしのこぼるるしとや 音の風

しるしのこぼるるしとや 音の風

前中納言お歌

しるしのこぼるるしとや 音の風

しるしのこぼるるしとや

しるしのこぼるるしとや 音の風

きーのわねきりものさひぬー
おーおーぬぬるる乃々るる

藤原公家

水あきや少し下る月とる
ちぬーぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
よふきぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ふきぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

宇治新三政大臣

新成るあーり入たわさし
しーひーるるひぬ月の新
良阿なりし

若代の初る凡のさあり
二新るるあられ
性道法

中一のあ移りの念れさあり
しじなるるあれさあり

前中納言大臣

ゆきわけのうへにちりり
ゆきゆき流るるのちりりの
ちりりゆきゆき流るるのちりり

お中納言定家

うきうきゆきゆき流るるのちりり

ゆきゆき流るるのちりり

板橋湖流渚歌

うきうきゆきゆき流るるのちりり

ゆきゆき流るるのちりり

二品法親王

ゆきゆき流るるのちりり

風のさびしうにちりり

大江成徳

ゆきゆき流るるのちりり

ゆきゆき流るるのちりり

本法清一

ゆきゆき流るるのちりり

ゆきゆき流るるのちりり

行服法

みきりや三十一のうねり
柿のきん野や道妙るん

素阿りし

羊はくれねるおろしとわらじ
もうりててもかへりねりきん

藤原智春

根さへきりしおろしとわらじ
かりしりきりかへりきん

導巻法所

おろしねり下葉しとわらじ
秋しりきりしりきりきん

お大僧正道玄

羊の原露とよおろしとわらじ
外さへりしりきりきん

西園寺入道お大僧正

わらじのきりしりきりきん
羊の原露とよおろしとわらじ

松が煙細く水運

うりこゆ〜深くと翔の〜らり音

日〜り〜人〜あ〜さ〜じ〜う〜さ〜あ〜るやませ前

林のわ〜し

町〜し〜さ〜る〜松の〜し〜ら音

孝暁法〜

松の〜ら〜あ〜れ〜と〜も〜ん〜と〜深〜る〜清〜れ

〜り〜乃〜風〜し〜ら〜り〜さ〜く〜や〜ま〜人

お大細さの氏

祢々月町あつ〜と〜此君り〜と

〜し〜く〜ち〜は〜わ〜し〜乃〜風〜と〜い〜え

る生か〜し

〜ら〜の〜音〜の〜り〜ぬ〜ら〜し〜ら〜ら〜と

〜そ〜な〜し〜と〜善〜あ〜ら〜風〜を〜秋〜と〜ん

善阿の〜し

〜し〜と〜終〜と〜し〜人〜は〜世〜と〜の〜じ〜と

二京法親王の御船なるの御書

月々あう〜ら〜る〜し〜と〜あ〜は〜し〜と

ふるり

敬啟

くつぎんふきのきりりりり

らりりりりりりりりりり

冬儀宗平

らんゆきいとりれぬきよしる清え

あふきいけきりりりりりり

後二位家隆

あふきいけきりりりりりり

あふきいけきりりりりりり

夏目前右大臣

あふきいけきりりりりりり

あふきいけきりりりりりり

前大納言等氏

あふきいけきりりりりりり

あふきいけきりりりりりり

あ大納言豊後

あふきいけきりりりりりり

月々一かみの少うらん
深き宮御居

ゆきをふりてくまのりて
ちかみよはこの川上の御水

教訓ありし

くまのりてくまのりて
くまのりてくまのりて

深き有御居

君の善きまゝに
ねの下の下とせ

くまのりてくまのりて
くまのりてくまのりて

深き有御居

くまのりてくまのりて
くまのりてくまのりて

くまのりてくまのりて
くまのりてくまのりて

深き有御居

くまのりてくまのりて
くまのりてくまのりて

くまのりてくまのりて
くまのりてくまのりて

深き有御居

くまのりてくまのりて
くまのりてくまのりて

ゆししの里は冬の〜
浮家氏

かりかりぬ ねもいらつと音おて
いすいわりとさるるのせん
ゆり音はさあ〜花し〜

西園寺入道公の御歌

〜こ〜ろ〜う〜音る〜
くれぬ〜さ〜や〜ん〜

北條院の歌

〜い〜ん〜あ〜ゆ〜さ〜あ〜
あ〜じ〜り〜ゆり〜き〜お〜
う〜た〜れ〜

北條院の歌

音りあ〜る〜な〜や〜ら〜
な〜き〜の〜ゆ〜い〜ら〜
ふ〜ら〜よ〜え〜ま〜ら〜

北條院の歌

わ川らぬ音は花よりさくら
じよふりり花風の下なる

園白前も長

音しそ歌つともまれあししり
うさしとつう歌なりのことけ

源教宗朝臣

はの歌も音あはれて人と
しからまうまう海のうさ

教宗朝臣

水とわぬ川のかりてし音海を
ゆと思ひあはれてまうられ

後少僧都水運

月としり嵐のし音
うさしとあはるのよあは

高河朝臣

月とあはる音あはるとあは
らうつひあはるあはるあは

十住法

言わさるはなまあきくみくはて
あきまのこころはくはくはくはく

二品法親王

入るるの秋の月の
あきまのこころはくはくはくはく

園白前太子

くはくはくはくはくはくはくはくはく
あきまのこころはくはくはくはく

女前上人

凡つりつてねの
あきまのこころはくはくはくはく

ほのこころはくはくはくはくはく

有東院

くはくはくはくはくはくはくはくはく

夕日こころはくはくはくはくはく

有河

積の上はくはくはくはくはくはくはく

つたはくはくはくはくはくはくはく

有河

言れ朔平氏 予々くく風
しとれ唐りの世移りし

法眼行堂

きぬききくこのふりきよき君侍え
わとちほみ移成うしじ 白雲

丹波守長

ふ人のつぎふれうきゆきうりて
ちぬきりし 移成りきよ

法眼行堂

来かきりしうめりて神をえ
飛のじくひるきよあはれ

教母法

月のうねりしうき君の朔り
文和元年二月家のふる世年
かりしうきしこのなみのうき

尊皇

きりし君の白うきしうき
文和元年十二月山野結子白と

ふはをらゆりなりえこり

世を法一

疾やきつ小野うこつゆのゆえ

この世のさうりいりりまうえ

信昭かきし

冬ころらとれましの梅こ





